

忠政公が亡くなった同年八月三日に、二代藩主長継公は二条城で蓮領相統を認められる。

その五年後、寛永十六年(一六三九)に、長継は忠政公の御霊屋を龍雲寺(本源寺)に建立。

五輪の塔も同時に建立されたものと思われる。延宝二年(一六七四)長継の嫡男忠継(三十八歳)が逝去、龍雲寺に葬る。後年、忠継の御霊屋が境内に建立されたが、残念ながら之は現存しない。

天和三年(一六八三)忠政公五十回忌に当たり御戒名「本源院殿前作州太守先翁宗進大居士」

に因み、寺号を「龍雲寺」から「本源寺」に改める。

貞享三年(一六八六)長成が十六歳で元服し四代藩主となる。この頃五代將軍綱吉が「生類憐み

の令」を政策(一七〇九年廃止)、長成は元禄八年(一六九五)武蔵児玉郡中野村(現東京都中野区)に、御犬小屋普請を仰せ付ける。大変な労力の末、無事期日内に完成させた。しかし、二年後

の元禄十年(一六九七)六月に、長成(廿七歳)が逝去した。

二代藩主長継の九男閑衆利が、長成の末期養子として幕府から家督相統を認められるも、同

年七月、重病に倒れ、跡目相統不能となり、津山藩森家は改易となる。改易後、森家は赤穂藩

森家・三日月藩森家・新見藩閑家の三家に分かれる。

本源寺は、森家四代九十五年間の時代、寺領を寛永三年に百石、寛文九年に二百石を領し、

総門から中門までの参道両側は蓮池や松林のある庭であった。(現在は農地改革により失う)

また、出雲街道を西今町から北の本源寺への曲がり角は、本源寺への入り口ということで、

「本源寺口」と呼ばれていた。津山藩主が松平家十萬石に代わった後、寺領は藩財政の事情も

あり減ぜられるも泰安寺、妙法寺とあわせ津山三箇寺と称して諸寺の上におかれ、以後は森家・

津山藩松平家兩家の庇護を受け明治を迎える。

安国寺中興、龍雲寺創建は海晏禪師であったが、故あって開山(初代)は天倫玄節禪師とする。

その後、海晏禪師は、慶長十四年に伊達政宗の請に応じ松島の瑞巖寺九十六世となる。

天倫禪師により元和年間に山号を「東海山」と改め、五世夢堂和尚の代に「本源寺」と改号。

本堂には御本尊に釈迦牟尼仏、右に達磨大師、左に木像森忠政公像(寛永八年(一六三一)

作で、公六十二歳の寿像)を祀る。鎮守は弁才天。また、森忠政公御守本尊の十一面觀音が伝

わる。赤い厨子に入っており、大きさは、台座から光背まで7寸5分(約28.5cm)。

本堂西の御霊屋には現在、忠政公をはじめ二代長継、三代長武、四代長成、父可成、兄長可、

乱丸、坊丸、力丸、忠政公奥方等、森家と閑家と松平家、全二十九柱の御霊碑を安置する。

森家墓所は、正面の五輪の塔が忠政公で、全七基中一番大きく、高さ約五m、幅三・三m。

向かって左が、慶長十二年に三十三歳で逝去された公奥方の智勝院殿(於岩)の墓。名護屋氏

の娘で豊臣秀長の養女。右は忠政公の次兄、森武蔵守長可の供養塔等、全七基。

長可は、家督の順では忠政公の先代に当たる。織田信長に仕え多くの戦功を上げ、一騎で

雜兵千人に値すると恐れられ、鬼武蔵として勇名を天下に馳せる。天正十二(一五八四)年、

小牧の役で豊臣秀吉に従い、長久手の合戦で徳川家康に対して奮戦し鬼武蔵の面目を發揮する

も、池田恒興、之助親子らと共に武運拙く戦死。長可の妻は恒興の娘であった。

文化財は、本堂・庫裏・中門・御霊屋・御成門が国、大名墓七基が県、森忠政公像が、市指定。

七月七日は、津山藩初代藩主、本源寺閑基森忠政公の御命日です。毎年この頃に年に一度、

御霊屋の扉を開きますので、皆様どうぞお参りにおいで下さい。

※お問い合わせ電話番号「0868 122 17351」

以上

現住廿三世誌